

独立行政法人 文化財研究所

奈良文化財研究所概要 [分冊]

Independent Administrative Institution
National Research Institute for Cultural Properties, Nara

2001





平城宮跡 朱雀門

2000年度事業の概要

1 調査と研究	2	2 研修・指導と教育	16
飛鳥藤原京の発掘調査	2	埋蔵文化財センターの研修と指導	16
平城京の発掘調査	3	2000年度埋蔵文化財発掘技術者等研修課程一覧	16
建造物の調査と研究	3	2000年度 日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧	18
歴史資料・書跡資料の調査と研究	4	京都大学大学院の教育	19
埋蔵文化財センターの研究活動	4	奈良女子大学大学院の教育	19
国際学術交流	5		
●河南省文物考古研究所との共同研究	5		
●環境による不動産文化財の劣化状況調査と 保存修復に関する調査・研究	5	3 遺跡整備・復原事業と展示	20
●炳靈寺文物保护所と炳靈寺涅槃像の 補修に関する共同研究	6	平城宮跡・藤原宮跡の整備	20
在外研修の成果	6	平城宮跡案内板設置工事	20
古代の国家支配における都市と交通路に関する研究	6	宮内省墓地復原工事	20
武器・武具に関する研究	6	朱雀門脇理施設新工事	20
海外からの招聘者一覧	7	東院庭園閣棲復原等工事	20
海外渡航一覧	8	藤原宮跡の整備	21
公開講演会	11	特別史跡山田寺跡の整備	21
第 86 回公開講演会	11	本庁舎3階大会議室改修工事	21
第 87 回公開講演会	11	平城宮跡資料館改修工事	21
発掘調査現地説明会	12	飛鳥資料館特別展	22
研究集会	13		
文部省科学研究費助成研究	13	4 その他	23
学会・研究会等の活動	15	これまでの刊行物	23
		人事異動	25
		職員一覧	26

1 調査と研究

飛鳥藤原京の発掘調査

飛鳥・藤原地域では、2000年度に20件の発掘調査・立会調査を実施した。以下、主要なものについて述べる。

藤原宮関係の調査は9件。朝堂院の学術調査（第107次）は、昨年の第100次調査区に南接する地域を対象に、朝堂院の東第一堂北半部と東面・北面回廊および先行条坊の解明を目的としておこなった。その結果、東第一堂は四面に廟をもつ南北棟礎石建物だが、日本古文化研究所が復原したような総柱建物ではなく、身舎の棟通りに柱のない通常の構造であることが判明した。第二堂以下についても同様と推定される。なお、東第一堂と東面・北面回廊とともに、建設時および解体時の足場穴を確認している。また、これらの下層では、藤原宮の造営に先行する2時期の条坊側溝を検出した。ただし、四条大路以南には古い段階の条坊側溝がなく、その施工は部分的なものであったことが知られる。このほか、平安時代末～鎌倉時代の宅地とともに違う遺構を多數確認し、中世の集落を研究するうえでも貴重な資料が得られた。

東方官衙北地区の調査（第108～5次）は、資材置場建設にともなう緊急調査である。10×2間の東西棟建物とそれに先行する東二坊間路の両側溝を検出した。この建物は、南側に並列する3棟の東西棟建物のうち中央のものと東西の妻を揃えており、官衙内の計画的な建物配置をうかがわせる。なお、この一画には、大炊寮を含む宮内省被官官司の存在が想定されている。

東北官衙と東方官衙北地区にまたがって実施した河川改修にともなう事前調査（第108～11次）では、南北棟建物3棟と東西堀1条、三条大路北側溝を確認した。うち、北側の東北官衙地区に属する2棟の建物は、桁行8間の同規模で、西側柱筋を揃えて南北に並ぶ。狭長なトレチ調査であったが、当該地区的建物配置を復元するうえで重要な知見を得ることができた。

藤原京の調査は4件。公衆浴場建設にともなう左京二条二坊の調査（第109・108～7次）では、東一坊大路のほか、4時期に細分される藤原宮期前後の遺構を確認した。坪内道路により、坪を1/2ないし1/4に分割して使用した状況がうかがえ、建物も小規模なものが散在する傾向を示す。出土遺物を考えあわせると、金属製品ないし漆製品の工房として使われた可能性が想定される。

左京六・七条二坊の調査（第113次）は、溜池改修に

ともなう事前調査。藤原京関係の遺構として、六条大路と東二坊間路、五角形の横板組井戸などを確認した。また、それに先行する方位の振れた建物や溝、鎌倉時代の石組井戸も検出している。

飛鳥地域等の調査は7件。石神遺跡の調査（第110次）は、本遺跡で都合13回目にあたる学術調査である。東西方向の2条の石組溝と東西堀からなる区画施設がつくり変えられている状況を確認した。ともに齐明朝の区画北限と推定されるが、天武朝には、遺跡の北限がさらに北へ移動したことも明らかとなった。

吉備池廐寺の調査（第111次）は、5年にわたる計画的学術調査の最終年度にある。金堂の南と北に調査区を設定し、中門については、予想どおり金堂の前面に存在することを確認した。ただ、かなり小規模なうえ、位置も金堂心から西に寄っている。したがって、西方の塔前面にも中門をおく異例の配置をとる可能性が想定される。また、金堂の北方では、講堂や北面回廊は検出できなかつたが、僧房とみられる大型の東西棟掘立柱建物が南北に並列することが判明した。これまでに発見されたなかでは最古の僧房遺構となる。

飛鳥池遺跡の調査（第112次）は、南に近接する酒船石遺跡との関係を究明するための学術調査である。跡の存在や出土遺物から、東側の谷筋に營まれた工房が南北130m以上の広がりをもつことが明らかとなった。あわせて、その上流にあたる酒船石遺跡とともに、一連の排水処理システムによって管理されていた可能性が想定され、両遺跡の緊密な関係をうかがうことができる。

なお、発掘調査にともなう現地説明会を実施した。実施年月日、担当者は以下の通り。

飛鳥藤原第107次（藤原宮朝堂院）

2000年9月9日

玉田 芳英

飛鳥藤原第110次（石神遺跡）

2000年12月23日

深澤 芳樹

飛鳥藤原第111次（吉備池廐寺）

2001年3月20日

箱崎 和久

平城京の発掘調査

2000年度に平城宮跡発掘調査部がおこなった発掘調査は、平城宮跡7件、平城京跡19件である。このうち、京内寺院の発掘調査が10件にのぼる。学術研究および史跡整備に関わる発掘調査は7件5,008m²、住宅建設等による緊急調査は19件1,736m²である。

平城宮内では、第一次大極殿院の整備に関連して、その内部を4次にわたり調査した。第313次調査では、既調査部分10カ所に調査区を設け、座標変換にともなう基準点の変異量を確認した。そのなかで、第一次大極殿院南門の基壇外側に敷いた凝灰岩製敷石痕跡を新たに確認し、第一次大極殿の復原に重要な示唆を与える成果を得た。第315・316次調査では、第一次大極殿院西面築地回廊とその西を流れる宮内基幹排水路を調査し、第一次大極殿院造営時の極めて大規模な造成の様子を明らかにした。特に第316次調査では、基幹排水路の改修と、その水源である園池の築造が、西池宮造営や第一次大極殿院全体の改造に密接な関わりをもつという所見を得た。第319次調査では、西面築地回廊西北隅を再調査し、西面築地回廊の複雑なねじれを確認した。

東院地域では、東院園池西北に流れ込む石組み蛇行溝の南端を調査した（第323次）。この調査により、東院庭園地区はそのほぼ全域の調査がおわったことになる。

平城京域では寺院の調査が多かった。特に興福寺では、その中枢施設である中金堂（第325次）のほか、その門跡寺院である一乗院（第317・321次）、大乗院（第318・314・11次）の調査もおこなった。このうち、中金堂の調査は2001年度も継続しておこなうため、その説明は次の機会にゆずる。

一乗院では、過去に調査されている一乗院宸殿の南側（第317次）と南東側（第321次）を調査した。第317次では、遺り水道構を検出し、文献に見える「金輪池」が宸殿の前面に存在する可能性が高くなった。第321次調査では、銅破片、銅滓など銅生産に関わる遺物が出土した。また、過去の宸殿の調査で出土し、重要文化財に指定された施釉陶器と一連のものとみられる二彩・三彩陶器が出土し、注目される。

大乗院では、池北西部付近（第318次）と旧大乗院御所西辺部（第314・11次）の調査した。池北西部では、様々な作庭技法をしめす遺構を検出した。

西隆寺では、回廊西南隅とその南側の調査をおこなった。回廊西南隅では、回廊の礎石跗付穴と瓦積み基壇外装を検出し、回廊の規模を復原する重要な資料を得た（第324次）。また、その南側では、巨大な柱を2本立てる特殊な掘立柱遺構を検出した（第320次）。

寺院以外では、左京三条一坊七坪の調査をおこない、この地域の土地利用の様相を明らかにした（第314・7次）。

なお、発掘調査の現地説明会を実施した。実施年月日、担当者は以下の通り。

平城第312次（阿弥陀浄土院）

清野 孝之

平城第315次（第一次大極殿院）

吉川 晴

平城第316次（第一次大極殿院）

清水 重敦

平城第318次（旧大乘院庭園）

中島 義晴

2000年9月15日

2000年7月1日

2000年11月18日

建造物の調査と研究

古代建築の調査研究

從来から継続している本研究では、一昨年度から所内の共同研究として、これまでに蓄積された調査研究、発掘された建築部材、保存修復工事で得たデータ、現存古代建築の観察などをもとに、細部にわたる古代建築の技法の総合的な研究をおこなっている。当年度は木部調査を重点とし、現存する古代建築の小屋組、架構、天井などと、保存されている建築古材の調査をおこなった。

また新たに、わが国の木造建造物において初めての試みとして、三次元レーザスキャナーを用いた測量を唐招提寺金堂で実施し、破損・変形を捉えた断面図の作成に成功した。

平城宮建物復原実施にともなう調査研究

大極殿関係では、前年度に製作した五分の一構造模型と屋根葺き実験原寸瓦葺き模型にもとづき、細部の検討をすすめて復原案の調整をはかり、実施設計に反映させた。また大極殿では、主として南門・東樓について、所内各分野の協力を得て検討し、構造形式の復原考察をまとめた。

木造建造物の保存修復のための調査研究

一昨年度から7年計画で発足した4部会からなるプロジェクトで、文化庁の協力による関係機関や大学との共同研究としておこなっている。部会1は保存修復の体制確立のための研究とし、多様化する文化財建造物に対応する新たな体制と組織の研究。部会2は保存修復に関する考え方と手法の研究として、過去の修復を評価するとともに、文化財保存修復の今後のるべき考え方、方法をさぐる。部会3は参考となる海外の事例を調査研究する。部会4は保存事業にともない蓄積された学術資料の整理と保存活用方法の研究で、文化庁ほかに収蔵された保存修復時の資料を再評価し、今後の活用方法を研究するものである。

各地の史跡の整備事業への助言・指導

柳之御所跡（岩手県）、下野国分寺跡（国分寺町）、新居関跡（新居町）、崇高堂（上野市）、近江国守跡（滋賀県）、春日大社社殿（春日大社）、津山城跡（津山市）、上淀庵寺跡（淀江町）、などの遺跡整備における建物復原に関する助言・指導をおこなった。

各地の文化財建造物の修復事業への助言・指導

新宿御苑（環境庁）、大阪中央公会堂（大阪市）、泉布館（大阪市）、布引ダム（神戸市）、唐招提寺金堂（奈良県）、今井町（福岡市）、備中高梁城天守等（高梁市）、原爆ドーム（広島市）、周防国分寺金堂（国分寺）、山口県旧県会議事堂（山口県）、脇町南町（脇町）などの保存修復にあたり、助言・指導をおこなった。

歴史資料・書跡資料の調査と研究

南都諸大寺を中心に、各寺社で所蔵されている歴史資料・書跡資料の調査研究を継続しておこなっている。興福寺では、昨年に引き続き『興福寺典籍文書目録第三巻』に収録予定分（第61函～第80函）につき写真撮影を継続しておこない、第69函分まで終了した。撮影終了分は漸次焼き付け作成中で、作成焼き付けにより、目録原稿の確認をおこなう予定である。東京大学史料編纂所と調査を共同でおこなっている薬師寺は、木箱に収納されている28箱分については第26,27函のみなお調書作成作業継続中であるが、それ以外の函分は調書作成が完了したので、つぎの文書草稿（第29函とした）に着手した。草稿には引出が

25あり、收められている資料はほぼすべて冊子で、江戸時代の年預所日次記等である。なお薬師寺関係では、『奈文研年報 2000-I』などに法会関係資料の伝来状況について報告した。東大寺は、収蔵庫第4室にある未整理の聖教文書の整理をおこない、経巻を除く未整理聖教文書函113函を調査対象とした調査計画を立てた。未整理聖教文書は、内容的には東大寺惣守伝來のもの、塔頭や小額職家から寄贈されたものなど多様なものと含んでいる。2001年度から研究課題「東大寺所蔵聖教文書の調査研究」で科学研究費補助金の交付を受けることになったので、その補助金も活用しつつ未整理分の目録作成を実現したい。西大寺は、奈良県教委担当の奈良県所在古版経調査に協力して、建仁寺版「梵網經菩薩戒本直伝」の調査をおこない、その紙背文書を紹介した。

その他文化庁関係調査で、醍醐寺聖教、仁和寺墨塗手稿聖教、寺から依頼を受けて石山寺知足庵聖教の調査に、参加協力をした。なお石山寺では資料叢書が継続編纂されているが、その『史料編第二』（2000.11刊）を奈文研現旧所員が協力し刊行した。

また滋賀県教委実施の長命寺文書調査、奈良吉野町教委の上田家文書調査がそれぞれ2000年度から3カ年計画でおこなわれることになり、その調査に参加協力をした。

所内では北浦定政関係資料の調査、写真撮影をはじめとして、溝辺家資料、小原文庫等の写真撮影をおこなった。

埋蔵文化財センターの研究活動

全国の埋蔵文化財の調査担当者に対する研修を開催するのみならず、各研究室、研究員がそれぞれ課題を決めて研究に取り組んでいる。また、各地で行われる発掘調査や遺物・遺構・遺跡の保存事業について、地方公共団体や関係諸機関からの要請に基づき、専門的・技術的な立場から指導・協力をおこなっている。その中から研究活動について、研究課題とその成果の一端を紹介する。

研究課題

遺跡・遺物の考古学的研究（遺物による考古史の研究・東亜陶壺の比較研究・古代官衙遺跡等の調査研究）、文化財の自然科学的手法による調査研究（動植物遺存体による環境考古学的研究・年輪による古气候と年代測定に関する研究・広域遺構探査法の開発研究）、文化財の自然科学的手

法による保存修復に関する研究（常時微動測定による古建築の構造と保存に関する研究・有機質遺物の材質とその保存処理法の開発研究・古代遺跡の保存科学的研究）、文化財情報システムの構築と活用法の研究（劣化写真のデジタル画像による復原研究・文化財情報ネットワークにおける通信法の研究・全国不動産文化財情報システムの普及流通に関する調査研究・遺跡地図情報システムの開発研究）

東亞陶磁の比較研究

中国河南省で三彩窯跡分布調査と地形測量をおこなった。訪問研究者は5名、来日研究者も5名である。

古代官衙遺跡等の調査研究

官衙関係遺跡・豪族居宅関係遺跡について調査報告書等を約1,000冊調査し資料収集とデータベースへの入力作業をおこなった。また、研究集会「鈔帶をめぐる諸問題」を共同実施、正倉関係木簡資料の収集作業を開始した。

広域遺構探査法の開発研究

広域を迅速に探査する手法の開発のために、地中レーダー探査を用いた方法を主体に実施。国内では、窯跡と工房跡（五所川原市・青森県）、庭園と御殿建物遺構（姫路城・兵庫県）、妻柏墓（吉野ヶ里遺跡・佐賀県）などを対象に、それぞれ遺構の特定を試みた。海外では、イタリアでローマ時代皇帝の別荘において浴場と円形プール、都市遺跡において劇場跡の検出に成功した。

有機質遺物の材質とその保存処理法の開発研究

迅速かつ安定した処理法をめざし、超臨界点二酸化炭素を用いた新規保存処理法の開発研究をおこなった。FTIR（フーリエ変換赤外分光分析）法により、有機質遺物の材質分析を進め、データベースの作成に取り組んだ。

遺跡地図情報システムの開発研究

遺跡データベースに地図を付加するための研究をおこなった。当然、問題となるのはデータの入力であり、基礎となる資料の収集にも力を入れている。

国際学術交流

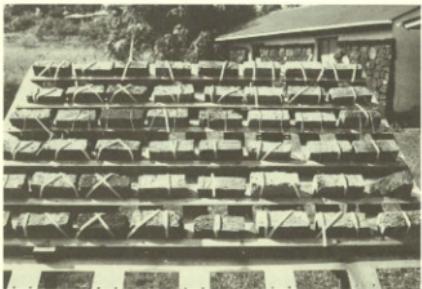
●河南省文物考古研究所との共同研究

本年度から新たに始まった事業である。河南省鞏義市大黄冶村に所在する唐三彩窯跡およびその產品に関する共同研究であり、メンバーには、鄭州市文物考古研究所・鞏義市文物保護管理所の研究者も加わっている。本年度は、8～10月には中国側の研究者を招聘し、7月・12月には日本側が河南省を訪れ、現地踏査をおこない、互いに学術交流をはかった。本年度は、次年度以降予定の発掘予定地の地形図と窯跡の分布図の作成が主な事業である。

●環境による不動産文化財の劣化状況調査と保存修復に関する調査・研究

苛酷な環境における不動産文化財の劣化状況の調査と保存修復に関する調査・研究を2件実施している。ひとつは、カンボジア・アンコール遺跡に関連するタニ窯遺跡群の発掘調査とその遺構・遺物の総合的な共同研究である。あわせて、カンボジアの若手研究者を招聘し、発掘調査法・遺物の調査研究法・遺跡の保存整備に関する研修・保存科学に関する研修などを実施している。もうひとつの事業は、チリ領・イースター島におけるモアイ石像をはじめとする石造文化財の考古学的・保存科学的研究である。日本国内とは大きく異なる環境条件のもとに所在する古代遺跡の発掘調査、および保存整備・修復に関する調査研究、すなわちカンボジアやイースター島における遺跡の発掘調査や保存修復の成果は、我が国の遺跡のみならず世界各地に分布する遺跡の保存協力にも資することができる。

カンボジア・タニ窯跡群については、7月下旬から8月中旬（3週間）にかけて第3次の発掘調査をおこなった。さらに、11月・2月には出土遺物の調査、ならびに遺跡の追加調査をおこなった。また、若手研究者3名を60日間招聘し、研修を実施した。イースター島・モアイ石像の素材は火山性の凝灰岩であり、その劣化状態は極めて悪い。新鮮な部分ではその圧縮強度は80～150Kg/cm²程度だが、劣化の激しい部分では20Kg/cm²に満たないほどの數値を示した。このような凝灰岩を強化する材料として、ケイ酸エスチルを基盤にしたものを用い、適宜アクリル樹脂・撥水剤のアルキルシロキサンなどを混合したものなど6種類を準備し、モアイ石像と同じ素材の凝灰岩を硬化し、暴露試験を実施した。



イースター島の屋外に設置された暴露実験台

●炳靈寺文物保管所と炳靈寺涅槃塑像の修補に関する共同研究

炳靈寺石窟は中国の著名な石窟寺の一つであり、中国甘肅省永靖県から南西へ約35キロの黄河の北岸に位置している。1960年代に、石窟から下流へ35キロ下った黄河にダムの建設が予定された。水位の上ることによって、低いところにあるいくつの石窟は全部浸水することになり、中国政府が資金援助して防護堤が修築された。もちろん、一部の洞窟内の文物に対しては移設がおこなわれた。そのひとつに大仏涅槃塑像がある。全長9mの中国最大級の塑像で、それは9分割されて現地から避難し、保護してきた。その復原修理計画が持ち上がり、その接合・復原事業に協力することとして、修復材料の提示、塑像修復技術の交流をおこなった。2000年6月4日～6月8日、新補修材料について実験結果の検討会を甘肅省博物館文物保護研究室において実施した。検討会には、中国文物研究所科学技術部・敦煌研究院・故宮博物院科学技術部などが参加した。



涅槃塑像の保存状態の調査

在外研修の成果

古代の国家支配における都市と交通路に関する研究

井上和人／平城宮跡発掘調査部

文明の中心地から遠隔の地にあった一丘陵地帯に盤踞するローマ族が須臾のうちにイタリア半島、地中海世界さらに西欧大陸の大半を支配するに至った能力が何であったか、それを探ねる旅であった。

人類が種を保持するには、数百人規模の種族集団で完結するという。ローマの場合、おそらく飢餓に起因する種族衰亡を避けるための行為としての略奪を契機として、集団の殻がうち破られることになる。外圧に対抗するための防衛と、より有効な防御手段である先制攻撃の反復の中で、土木技術にすぐれた能力、経験をもっていたローマ族が圧倒的な戦闘能力を發揮はじめた。以後の様々な歴史的軒余曲折は当然の事ながら、ローマは自乗的に版図を拡大し続ける。支配領域の拡大を促進し、維持を保証したのも卓越した土木技術であり、その先端的な表れとしてのローマン道路、ローマンウォールそしてローマの生活様式を完璧に移植しようとした植民都市の建設であった。

武器・武具に関する研究

小林謙一／埋蔵文化財センター

2000年7月27日から2000年10月14日の間、連合王国、ギリシャ、エジプトを訪れ、主として、ギリシャ・ローマ時代の武器・武具の変遷を辿り、日本における変遷の要因との比較を中心に、調査・研究をおこなった。

ギリシャにおける金属製防禦具の出土は、現在のところ、紀元前1400年頃まで遡るが、資料が増加するのは、紀元前6世紀を中心とする時期になってからである。ギリシャの防禦具は、基本的に、1対1の戦いを前提とした武装であった。ローマ時代になると、新たな攻撃用武器の出現に対して、mail armorやscale armorに替わり、strip armorが開発される。また、長方形盾の導入は、この時期、戦闘が個々の兵士の戦いから、集団による戦いへと変化した状況をうかがわせる。騎兵と歩兵で、武装に基本的な差はなく、馬を用いた戦闘も、戦車から騎兵主体に移行する。このように、ローマ時代は、武装と戦闘方法において、両期をなしていた。

海外からの招聘者一覧

- 韓国：国立海洋遺物展示館 遺物保存研究士
金 益柱／'00.6.5～6.18
- アメリカ：ポートランド州立大学 人類学科教授
ケネス・エイムス／'00.6.23～7.14
- 韓国：三星文化財团湖嶽美術館保存研究所
許 佑寧／'00.6.26～7.9
- 中国：遼寧省文物考古研究所 所長
王 晶辰／'00.7.5～7.19
- 中国：遼寧省文物考古研究所 副所長
李 新全／'00.7.5～7.19
- 中国：遼寧省文物考古研究所 研究員
李 勇軍／'00.7.5～7.19
- 中国：中国社会科学院考古研究所 研究員
谷 飛／'00.7.17～9.13
- 中国：中国社会科学院考古研究所 研究員
石 白社／'00.7.17～9.13
- 中国：浙江大学 助教授
鄭 雲飛／'00.7.24～'02.7.23
- チリ：チリ国立保存修復センター 主任研究員
モニカ・バーモンデス／'00.8.5～8.20
- 中国：河南省文物考古研究所 副所長
秦 曙光／'00.8.21～8.30
- 中国：鄭州市文物考古研究所 所長
王 文華／'00.8.21～8.30
- 中国：華義市文物保護管理所長
劉 洪森／'00.8.21～8.30
- 中国：河南省文物考古研究所第三研究室
副研究員
趙 志文／'00.8.21～10.14
- 中国：河南省文物考古研究所第三研究室
助理研究員
劉 海旺／'00.8.21～10.14
- 中国：中国社会科学院考古研究所 所長
劉 嶽柱／'00.8.30～9.13
- 中国：中国社会科学院考古研究所 副研究員
顧 智界／'00.8.30～9.13
- 中国：中国社会科学院考古研究所 科研處
副處長
劉 凱軍／'00.8.30～9.13
- インドネシア：ジョクジャカルタ特別区文化財保護局
ヌクプラセツヤ マスクール／'00.9.18～9.22
- 中国：河南省文物管理局 副主任科員
張 慧明／'00.9.18～9.22

- アメリカ：ネブラスカ大学人類学科 教授
ピーター・ブリード／'00.10.4～10.8
- 韓国：湖嶽美術館附設文化財保存研究所
研究員
姜 昌求／'00.10.10～10.31
- ガーナ：国立博物館 主任学芸員
オボク・アチャンポン／'00.10.11～'01.4.10
- 韓国：国立慶州文化財研究所 学芸研究士
李 相俊／'00.10.13～10.25
- 韓国：国立慶州文化財研究所 学芸研究士
李 惕暉／'00.10.13～10.25
- カンボジア：ブノンバン王立芸術大学（卒業生）
CHEA Sarith／'00.10.16～12.2
- カンボジア：ブノンバン王立芸術大学（卒業生）
Uch Kangkerya Pheakdey／'00.10.16～12.2
- カンボジア：ブノンバン王立芸術大学（卒業生）
Heng Chhun Oeurn／'00.10.16～12.2
- 韓国：国立扶餘文化財研究所 学芸研究室長
金 容民／'00.10.18～10.25
- ネバール：国立博物館 学芸課長
B.R. ラワット／'00.10.20～10.31
- 韓国：国立文化財研究所長
趙 由典／'00.10.30～11.3
- 中国：陝西省考古研究所 保衛科長
劉 煥成／'00.11.6～11.18
- 中国：陝西省考古研究所 編集室長
李 自智／'00.11.6～11.18
- 中国：陝西歴史博物館 助理研究員
羅 騰／'00.11.6～11.18
- 中国：陝西歴史博物館 唐墓壁画研究中心画家
袁 單軍／'00.11.6～11.18
- 中国：中国甘肃省博物館 文物保護部 副部長
張 建全／'00.11.6～11.20
- ミャンマー：文化局考古部員
Daw Sanda Khin／'00.11.8～12.20
- 中国：国家文物局博物館部 科技教育处・科員
刀 道胜／'00.11.8～12.23
- アメリカ：スマソニア研究機構 材料研究教育センター 主任研究官
バメラ バンディバー／'00.12.1～12.11
- 中国：文物研究所 文物保護科技中心副主任
嵇 益民／'00.12.5～12.19
- 韓国：国立文化財研究所 学芸研究士
李 鍾烈／'00.12.12～12.27
- 韓国：国立文化財研究所 学芸研究士
申熙福／'00.12.12～12.22
- 韓国：国立慶州文化財研究所 学芸研究官
金 壽範／'00.12.12～12.18
- 韓国：国立慶州文化財研究所 学芸研究士
黃 仁錫／'00.12.12～12.18
- カンボジア：アンコール遺跡保護地域整備
当局 調査員
Ea Darith／'00.12.18～12.26
- アメリカ：ニューヨーク市立大学 クイーンズカレッジ 助教授
牧原 美紀／'00.12.18～12.26
- ドイツ：チュービンゲン大学 先史・古代
史・中世考古学部 教授
ハンスピーター・アーブマン／'01.1.8～2.10
- アメリカ：フロリダ州立大学 教授
グレン・ドラン／'01.1.9～1.11
- 韓国：圓光大学校 人文学部 副教授
崔 完奎／'01.1.15～6.14
- アメリカ：スマソニア研究機構 フリアーサックラー美術館 主任研究員
チエイス・W・トマス／'01.1.25～2.9
- 韓国：忠南大学博物館 研究員
韓 淳淑／'01.1.31～2.3
- アメリカ：ジョージワシントン大学人類學科教授 /スマソニア研究機構 国立自然史博物館研究員
Alison Brooks／'01.2.8～3.13
- アメリカ：デーバー大学 考古学部 教授
Lawrence, B. Conyers／'01.2.14～2.18
- イギリス：ケンブリッジ大学地球科学科
客員研究員
Immo Trinks／'01.2.14～2.25
- イタリア：国立文化財応用技術研究所
ローマ支部 主任研究官
Salvatore Piro／'01.2.14～2.23
- オーストリア：ウィーン大学 考古科学研究所 教授
Wolfgang Neubauer／'01.2.14～2.20
- フランス：パリ第6大学 応用物理学部
助教授
Michel Dabas／'01.2.15～2.20
- 韓国：湖嶽美術館保存科学研究所
許 佑寧／'01.2.20～2.23
- 韓国：国立扶餘文化財研究所 所長
崔 孟植／'01.2.23～2.25
- 韓国：国立全南大学校 助教授
白 志星／'01.2.23～2.25
- 中国：遼寧省文物考古研究所
呂 学明／'01.2.24～3.24
- 中国：陝西省考古研究所 所長
韓 偉／'01.3.19～3.28

奈文研研究者の海外渡航一覧

- 沢田 正昭**：中国
'00.4.5～4.13／中国・クムトラ千仏洞遺跡調査（ミッション）のため 先方負担 ユネスコ北京事務所
- 高妻 洋成**：チリ共和国・アメリカ合衆国
'00.4.23～5.6／過疎条件下にある文化財の保存修復に関する現地調査と資料収集のため 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）
- 黒崎 直**：韓国
'00.5.23～5.27／日韓初期都城の形成と発展過程に関する調査研究及び資料収集 海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 小林 謙一**：韓国
'00.5.23～5.27／日韓初期都城の形成と発展過程に関する調査研究及び資料収集 海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 西村 康**：イタリア
'00.5.29～6.15／アルチナツツオ遺跡及びフォーラムノビューム遺跡における地中レーダー探査 科学研究費
- 肥塚 隆保**：中国
'00.6.4～6.8／炳靈寺石窟大仏塑像の修理に関する日中共同研究 科学研究費
- 黒崎 直**：中国
'00.6.7～6.11／中国遼寧省文物考古研究所との共同研究に関する打合せ及び調査研究（アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する共同研究） 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 小林 謙一**：中国
'00.6.7～6.11／中国遼寧省文物考古研究所との共同研究に関する打合せ及び調査研究（アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する共同研究） 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 高瀬 要一**：韓国
'00.6.9～6.15／「東アジアにおける古代庭園遺跡の調査研究」にともなう現地調査、研究打合せ 科学研究費
- 小野 健吉**：韓国
'00.6.9～6.15／「東アジアにおける古代庭園遺跡の調査研究」にともなう現地調査、研究打合せ 科学研究費
- 川越 俊一**：韓国
'00.7.10～7.14／韓国出土ガラス等の資料調査 海外文化財調査等外国旅費（生産遺跡）
- 松村 恵司**：韓国
'00.7.10～7.14／韓国出土ガラス等の資料調査 海外文化財調査等外国旅費（生産遺跡）
- 花谷 浩**：韓国
'00.7.10～7.14／韓国出土ガラス等の資料調査 海外文化財調査等外国旅費（生産遺跡）
- 金子 裕之**：韓国
'00.7.11～7.13／アジア地域における放射性炭素年代測定法の信頼性向上のための古年輪資料調査のため 科学研究費
- 金子 裕之**：中国
'00.7.20～7.23／東アジアにおける生産遺跡の調査研究協力打合せ 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（生産遺跡）
- 賀 淳一郎**：中国
'00.7.20～7.23／東アジアにおける生産遺跡の調査研究協力打合せ 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（生産遺跡）
- 中村 一郎**：韓国
'00.7.27～8.10／大韓民国西部地域における無文土器でタタキ技法の存否を検討する 科学研究費
- 森本 譲**：カンボジア
'00.8.3～8.11／タニ宗跡群の発掘調査 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）
- 高橋 克勝**：韓国
'00.7.18～7.22／学会参加と日韓墳墓資料の收集 研究代表者負担 科学研究費
- 杉山 洋**：カンボジア
'00.8.2～8.7／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査のため 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）
- 沢田 正昭**：アメリカ合衆国・ハワイ
'00.8.5～8.13／イースター島・モアイ石像の現地保存のための火山性凝灰岩保存材料の耐候性に関する研究 の発表 科学研究費
- 西村 康**：カンボジア
'00.8.9～8.26／シェムリアップ州所在空跡の調査 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）
- 杉山 洋**：カンボジア
'00.8.18～8.27／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査のため 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）
- 出辺 征夫**：韓国
'00.8.25～8.29／ソウル、公州、扶余の都城遺跡の現地調査と慶州新羅王京の調査に関する協力についての打合せ 海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 木村 勉**：ドイツ連邦共和国
'00.8.26～9.7／産業遺産の保存に関する現地調査及び情報収集 研究代表者負担 科学研究費
- 町田 章**：中国
'00.7.27～8.1／GISを用いた古代都城の用排水系統に関する統括的研究及び「21世紀の中国考古学と世界考古学」会議出席 科学研究費
- 花谷 浩**：韓国
'00.8.27～9.9／ソウルおよび新羅王京（慶州）の調査研究 海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 中村 一郎**：カンボジア
'00.8.18～8.27／アンコール文化遺産保護に関する研究協力 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）
- 沢田 正昭**：韓国
'00.11.23～11.26／慶州文化財研究所主催の国際学術大会における発表のため 先方負担 韓国国立慶州文化財研究所
- 肥塚 隆保**：韓国
'00.11.23～11.26／慶州文化財研究所主催の国際学術大会における発表のため 先方負担 韩国国立慶州文化財研究所
- 沢田 正昭**：中国
'00.9.8～9.15／中国古代壁画の資料収集（甘肃省博物館）唐代壁画の調査研究、並びに復原的研究（陝西省歴史博物館・考古研究所） 科学研究費

- 肥塚 隆保：中国
'00.9.8～9.16／中国古代燈画の資料収集（甘肃省博物館）唐代壁画の調査研究、並びに復原的研究（陝西省歴史博物館・考古研究所）
科学研究費
- 高瀬 要一：中国
'00.11.17～11.26／「東アジアにおける古代庭園遺跡の調査研究」による洛陽・西安地域における古代庭園遺跡の調査 科学研究費
- 小野 健吉：中国
'00.11.17～11.26／「東アジアにおける古代庭園遺跡の調査研究」による洛陽・西安地域における古代庭園遺跡の調査 科学研究費
- 川越 俊一：韓国
'00.10.9～10.13／出土ガラス関係資料の調査 科学研究費
- 西口 博生：韓国
'00.10.9～10.13／日韓初期都城の形成と発展過程に関する共同研究のため 海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 肥塚 隆保：韓国
'00.10.9～10.13／日韓初期都城の形成と発展過程に関する共同研究のため 海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 小池伸彦：韓国
'00.10.9～10.13／日韓初期都城の形成と発展過程に関する共同研究のため 海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 石橋 文登：中国
'00.11.4～12.7／アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 蓮沼 麻衣子：中国
'00.11.4～12.7／アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 千田 刚道：中国
'00.11.11～11.25／アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 山崎 信二：中国
'00.11.20～11.25／アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 浅川 駿男：中国
'00.11.23～11.27／アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 高妻 洋成：中国
'00.10.26～11.1／過酷な環境条件下における造構断面の転写法の開発ならびに大型土木製品の貯蔵凍結乾燥に関する共同研究 科学研究費
- 西村 康：韓国
'00.10.30～11.4／文化財研究所（韓国）において講演および現地探査 先方負担 韓国文化財研究所
- 松井 章：韓国
'00.11.6～11.16／韓国出土の動物遺存体の観察、DNAおよび炭素・窒素同位体分析のための試料サンプリングのため 科学研究費
- 豊島 寛博：中国
'00.12.2～12.10／アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する共同研究 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 鍛村 宏：韓国
'00.10.30～11.4／東アジアにおける生産遺跡の調査研究協力 渡航費：政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（生産遺跡）
- 澁澤 貴：韓国国立文化財研究所
- 村上 隆：アメリカ合衆国
'00.12.15～12.20／2000 稲太平洋国際化学会議（PACIFICHEM2000）において研究発表を行うため 科学研究費
- 高橋 克壽：中国
'00.12.5～12.11／東アジアにおける生産遺跡の調査研究協力 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（生産遺跡）
- 川越 俊一：中国
'00.12.5～12.11／河南省文物考古研究所との共同研究（考古科学の総合的研究） 科学研究費
- 小林 謙一：中国
'00.12.2～12.10／アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する共同研究 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 牛船 茂：中国
'00.12.2～12.10／アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する共同研究 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 劉 淳一郎：中国
'00.12.5～12.11／河南省文物考古研究所との共同研究 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（生産遺跡）
- 深澤 芳樹：韓国
'00.12.13～12.16／第9回文化財研究国際学术学会参加のため 先方負担 韓国国立文化財研究所
- 町田 章：韓国
'00.12.13～12.16／2000年度文化財研究国際学术大会出席のため 海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 井上 直夫：カンボジア タイ
'00.12.9～12.16／アンコール文化遺産保護に関する研究協力 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）
- 杉山 洋：カンボジア
'00.12.9～12.16／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査のため 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）
- 森本 晋：カンボジア
'00.12.13～12.19／タニ窯跡群の調査研究 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）
- 西村 康：カンボジア
'00.12.9～12.17／①ハイヨンシンボジウムへ参加、シェムリアップ州所在窯跡の調査について研究発表すること ②上智大学と共同してアンコール・トム遺跡からパンテアイ・クデイ遺跡へ基準点を移設する 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）
- 高瀬 要一：カンボジア
'00.12.9～12.14／アンコール遺跡群・タニ窯跡群保存整備計画立案に関する調査研究 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）
- 鶴野 和己：イギリス
'00.12.10～12.24／大英図書館所蔵チベット語木札の調査 研究代表者負担 科学研究費
- 沢田 正昭：カンボジア
'00.12.9～12.14／アンコール遺跡・タニ窯跡群保存整備に関する調査研究 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）

- 井上 和人：連合王国 ドイツ イタリア
'01.1.2～3.22／古代の国家支配における都市と交通路に関する研究 文部省在外研究员旅費
- 浅川 滋男：中国
'01.2.12～2.19／中国における水上居住に関する資料収集 科学研究費
- 小野 龍吉：アメリカ合衆国
'01.2.25～3.4／日本庭園英語辞典に関する成果公表(庭園考古学研究集会) 科学研究費
- 金田 明大：大韓民国
'01.2.26～3.2／GISを用いた古代都城の用排水系統に関する総括的研究のための資料収集 科学研究費
- 神野 恵：大韓民国
'01.2.26～3.5／GISを用いた古代都城の用排水系統に関する総括的研究のための資料収集 科学研究費
- 中島 義晴：大韓民国
'01.2.26～3.5／GISを用いた古代都城の用排水系統に関する総括的研究のための資料収集 科学研究費
- 小野 龍吉：ニュージーランド
'01.3.11～3.22／日本庭園用語の英訳に関する研究協議・成果公表 科学研究費
- 清水 重教：中国
'01.3.5～3.25／アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 吉川 墓：中国
'01.3.5～3.24／アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 浅川 滋男：中国
'01.3.12～3.15／アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 田辺 征夫：中国
'01.3.12～3.18／古代都城における用排水システムのデータ収集 科学研究費
- 小澤 親：中国
'01.3.12～3.24／漢長安城の共同発掘調査 科学研究費
- 村上 隆：アメリカ合衆国
'01.3.12～3.24／スミソニアン研究機構との国際共同研究「アジア地域における陶磁器の流通に関する自然科学的調査」のための調査・及び研究打合せ 科学研究費
- 高瀬 要一：ベトナム
'01.3.18～3.25／窯跡など遺跡保存状況調査 科学研究費
- 中村 一郎：中国
'01.3.12～3.24／アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 沢田 正昭：韓国
'01.2.22～2.25／考古科学研究の資料収集と研究打合せ 韓国国内遺跡出土の漆製品に関する資料調査とその分析と保存 科学研究費
- 森本 晋：フランス
'01.3.12～3.17／アンコール遺跡群関係資料の調査 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）
- 箕 淳一郎：アメリカ合衆国
'01.3.12～3.24／スミソニアン研究機構との国際共同研究「アジア地域における陶磁器の流通に関する自然科学的調査」のための調査・及び研究打合せ 科学研究費
- 西村 康：フランス
'01.3.12～3.17／アンコール遺跡調査関連資料収集のため 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）
- 田辺 征夫：大韓民国
'01.2.24～3.1／日本出土原史古代織維製品と関連する韓国出土資料の調査及び集成のため 研究代表者負担 科学研究費
- 杉山 洋：タイ ベトナム
'01.3.14～3.25／バンコク及びベトナム周辺の窯跡調査 科学研究費 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）

公開講演会

第86回公開講演会 2000年5月13日

◆内田和伸：近代における古代遺跡の保護と顕彰

明治末期から大正8年（1919）の史蹟名勝天然紀念物保存法の制定までの、奈良県および京都府における古代の寺院跡と宮殿跡の保護と顕彰について具体的な状況を紹介した。

明治期には寺院の礎石を庭園の仰藍石として転用することが流行し、古代寺院跡の破壊にもつながった例もみられた。こうした中で明治41年（1908）の大安寺西塔跡の保存整備は最も早い時期のものであった。

古代宮跡では、明治28年（1895）の平安遷都千百年紀念祭などが契機となって平安宮、長岡宮、平城宮、藤原宮、大津宮、恭仁宮などで遺跡の保護と顕彰がはじまり、古代天皇制の象徴的な施設である大極殿の跡が注目された。高揚するナショナリズムの中、明治32年（1899）の貴族院議会では皇室の権威伸張を意図した「御歴世宮跡表保ノ建議」が可決され、顕彰に弾みがつき、明治36年（1903）には長岡宮跡で大極殿遺址来拝所が新設されるなどした。しかし、遺跡保存は地元の保存会任せで問題も生じていた。

第87回公開講演会 2000年10月21日

◆長尾 充：繼手と仕口 山田寺から明治建築まで

日本の木造建築技術のうち、部材の接合法である繼手と仕口について、歴史的展開を概説した。木製部材の接合は先史時代に遡るが、古代建築の繼手と仕口は、7世紀中葉造営の山田寺東面回廊の建築出土部材に求めた。この出土材はまとまった資料として最古例に属し、各部の技法は、現存する古代建築と同等以上の技術を示す。中世には、大仏様の見せる構造に即した形、禅宗様の装飾化に即した目立たぬ形として再移入される。書院造りと数寄屋造りでは、構造材と化粧材の明確な分離の上に洗練が進む。近世初頭の城郭建築では大断面部材に中世的な技法も再現された。近世は技術の爛熟期で、大工家伝書等は職人技を競うような繼手と仕口を見せる。明治初期の洋風建築も伝統技法が支えており、特に官庁營繕記録中の建築仕様書によれば、ボルト等の洋風技術を採用しつつも、標準的な部位は伝統的技法が占める。また繼手と仕口の仕様を全く記さない例もあり、既存の技法に依存していたこと等を述べた。

◆次山 淳：土器からみた初期大和政権

考古学の立場から政治史にアプローチする試みとして、土器を材料として集団の関係と構造に着目し、前方後円墳の出現に象徴される初期大和政権のありかたを検討した。まず当該期の畿内の土器について様式構造と技術基盤、その成立過程を説明し、弥生時代から古墳時代に、むしろ内的な要素である土器作りの技術が外来要素に置換することを指摘した。次に土器移動の問題を取り上げ、畿内から他地域、他地域から畿内、双方向の動きを比較検討した。時系列でみると両者共に、移動先や移動元の重心が西日本から東日本へと変化することが認められた。さらに古墳造営集落の土器の特質についても言及した。

以上の検討から、地域連合といわれる初期大和政権における集団間の関係や構造を具体的に読み取るとともに、埴輪や古墳築造労働力などの視点を加え、吉備・山陰・東海など他地域の集団が、等質の関係ではなく階層性をもって構成する姿をそこに想定した。

発掘調査現地説明会

◆ 2000年4月15日(土)

平城第312次（法華寺阿弥陀浄土院）

平城宮跡発掘調査部 清野 孝之

参加者：386名 調査面積：355m²

◆ 2000年7月1日(土)

平城第315次（平城宮第一次大極殿院）

平城宮跡発掘調査部 吉川 聰

参加者：296名 調査面積：975m²

◆ 2000年9月9日(土)

飛鳥藤原第107次（藤原宮朝堂院）

飛鳥藤原宮跡発掘調査部 玉田 芳英

参加者：500名 調査面積：3140m²

◆ 2000年9月15日(金)

平城第316次（平城宮第一次大極殿院）

平城宮跡発掘調査部 清水 重敦

参加者：400名 調査面積：997m²

◆ 2000年11月18日(土)

平城第318次（旧大乗院庭園）

平城宮跡発掘調査部 中島 義晴

参加者：165名 調査面積：1140m²

◆ 2000年12月23日(土)

飛鳥藤原第110次（石神遺跡）

飛鳥藤原宮跡発掘調査部 深澤 芳樹

参加者：630名 調査面積：440m²

◆ 2001年3月20日(火)

飛鳥藤原第111次（吉備池麻寺）

飛鳥藤原宮跡発掘調査部 箱崎 和久

参加者：1000名 調査面積：1140m²



現地説明会（平城第315次）

研究集会

◆官営工房研究会

2000年12月15日

通算9回めを数える官営工房研究会。今回は高橋照彦氏（奈良国立博物館）「古代の三彩・錦釉陶器生産」、保坂智子氏（橋本県上三川町教育委員会）「上神主遺跡とその文字瓦」、田熊清彦氏（橋本県埋蔵文化財センター）「下野国内とその文字瓦」、大橋康夫氏（同）「上神主遺跡と水道山瓦窯」の4本の報告をめぐらして活発な討議、意見交換をおこなった。

◆古代律令国家の須恵器の調査制を考えるII

2000年11月25～26日

開催目的は、都城以上須恵器を徹底的に群別し、それぞれの群の產地を各地の研究者とともに検討し、古代における須恵器の調査制の十体を明らかにすることである。11月25・26日に開催、須恵器研究者約35名が集う。都城側から5本、生産地側から3本の研究報告をおこない、活発な意見交換がなされた。

◆保存科学研究集会

2000年12月7日

「出土木製品の保存処理における諸問題」をテーマに、保存科学研究集会をおこなった。今回の研究集会は、「出土木材の保存処理研究において、学会などで報告される事例は良好な結果を得られたものばかりであるが、むしろ失敗例を報告し、問題点とその対応を共有することが望まれる」とのコンセプトにもどいておこなわれた。研究集会では、まず、当研究室埋蔵文化財センター長・沢田正昭氏より、「過去・現在・未来」という演題で日本における出土木製品の保存処理の歴史、現状および将来的展望について基調講演がおこなわれ、続いて、元興寺文化財研究所保存科学センター長・増沢文武氏による「出土木材の保存処理で生じた問題点と対応」と題する特別講演がおこなわれた。研究発表では、専門家から保存処理の事例、失敗例、解決策などの保存処理の現場において大いに役に立つ報告がおこなわれた。ポスター発表では、各自治体などにおいて実際に保存処理に従事する方々から、多くの事例を紹介していただいた。保存処理の失敗の中には、いまだその原因が究明されていない問題も多い。今後はこれらの問題についてさらに研究を進める必要がある。失敗例を報告するということはきわめて困難なことではあるが、それらをあえて報告

し、問題点と解決策を広く共有することができたことはきわめて意義深い。



保存科学研究集会発表風景

◆遺跡G I S研究会

2000年11月26日

埋蔵文化財センター情報資料室では、2000年11月26日、遺跡GIS研究会を「考古学GISの現状と課題 考古学における空間分析法と情報の共有化」のテーマのもと開催した。本年で第5回目となるこの会は、GIS(地理情報システム)の考古学分野での応用を研究する会で、文部省科学研究費の成果などの研究発表のほか、機器やソフトの展示も行い盛会であった。

会は、まず奈良大学の泉拓氏が料研究費の概要を説明、森本が「発掘調査と空間データ奈良国立文化財研究所を例として」をおこなった。昼食後、九州大学の宮本一大氏が「欧米における考古学GIS」を発表後「考古学における空間分析法」と題したパネルディスカッションをおこなった。その後、東京大学の貞農幸雄氏が「クリアリングハウスとメタデータ」、奈良大学の碓井照子氏が「考古学におけるクリアリングハウスとメタデータ」を発表した。

文部省科学研究費助成研究

◆考古科学の総合的研究

代表者・沢田正昭 C O E 形成基礎研究 繼続

1998年度から始まった考古科学の研究拠点形成の研究は、3年目を終えた。本研究は、遺跡調査法研究部門・環境考古学研究部門・古跡研究部門・保存科学研究部門の4部門の研究課題に沿って実施している。

◆古文書料原本の基礎的データ測定記録装置の研究製作

代表者・綾村 宏 基盤研究(A)(1) 繼続

本研究の目的は、古文書料紙の縱横の位置、厚さ、重さ、色調を測定記録し、古文書全体の画像を記録する装置を作製することであるが、最終年度である今年度測定記録装置は完成した。装置の重量などいくつかの改良点はあるが、今後この装置を使用して料紙のデータを収集するとともに、出来るだけ範囲で装置を修正していく。なお装置の仕様など記載した冊子を作成した。

◆G I Sを用いた古代都城の用排水系統に関する統計的研究

代表者・田辺征夫 基盤研究(A)(2) 繼続

本研究は2年目を迎えた。昨年実施した奈文研調査分の平城京条坊割溝計測データの収集に引き続き、奈良市教育委員会実施分の条坊道構データの収集、整理を進め、平城京域の標高デジタルモデルの作成作業を続けていく。また排水路としての溝道構の土木工学的評価手法を平城宮内検出の基幹排水路構造をモデルに試みた。これまでの研究成果と展望について10月に東京・工業大学で開催された地理情報システム学会において発表した。

◆唐代古墳壁画の転写・輸送・保存修復に関する科学的研究

代表者・町田 韶 基盤研究(A)(2) 繼続

墓室からはぎ取られた壁画の総合的調査とその劣化防止・壁体の強化・はぎ取り技術などの開発研究をおこなった。唐代壁画顔料の接着剤に関しては、中国で70年來の実験を持つ、機関との可能性を示唆。はぎ取った壁画の背面を強化する素材を検討。古代顔料の分析結果をもとに色見本カードを作成し、その耐候性について測定。



唐代壁画・塑像の保存実験

◆アジア地域における陶磁器の流通に関する自然科学研究

代表者・沢田正昭 基盤研究(A)(2) 繼続

スマソニア研究機構・フリヤー美術館の陶磁器コレクションのうち、ケメール陶器について化学分析の共同研究を実施。美濃・瀬戸・九谷・唐津などの窯跡出土品、消費地出土品など約260点の陶磁器片の分析。ベトナム・タイ・カンボジアなどの陶磁器の分析。国際研究発表会をワシントンDCで開催(1999年3月8日)。

◆動物考古学的方法による日本、および周辺地域における古代家畜史の研究

代表者・松井 章 基盤研究(B)(1) 新規

縄文、弥生遺跡から出土した動物遺存体の中で、家畜の可能性のあるイノシシ・ブタの骨を選び、DNAや炭素・窒素安定同位体による食性分析をおこなった。11月6日から16日まで韓国を訪問して、ブサンからソウルまで主要研究機関を訪問し、主として原三國時代(1~3世紀)の遺跡から出土した動物遺存体を実見し、ブタ・イノシシ、ウシ、ウマなどの骨を選別して、その計測を行い、DNA、安定同位体分析用のサンプルを採取した。その結果、3世紀段階で、豚の飼育、骨の利用技術について韓国が日本に大きな影響を与えていたことを明らかにできた。



韓国慶州出土のウマの頭蓋骨
(三国新羅時代 横南文化財研究院発掘)

◆東アジアにおける古代庭園遺跡の調査研究
代表者・高瀬要一 基盤研究（B）（2）新規
日本、中国、韓国における古代庭園の系譜を明らかにする研究の初年度。中国と韓国の計12箇所の遺構について調査担当者に面接し情報をあつめた。また、2001年2月24・25日には日本と韓国の庭園史研究者、庭園遺跡発掘担当者などをあつめてシンポジウムを開催し、情報交換と意見交換をおこなった。

◆中世後半から近世における瓦生産の研究
代表者・山崎信二 基盤研究（C）（2）継続
本州における中世末から近世前半の瓦を、中世Ⅳ期、近世Ⅰ期（1575～1583）、近世Ⅱ期（1583～1591）、近世Ⅲ期（1591～1607）、近世Ⅳ期（1607～1640）、近世Ⅴ期（1640～1680）に分類した。製作技術上は、初期頃に鉄線切りの普及があり、Ⅴ期に軒平瓦の瓦当上端における中央幅広の面取りが消失する。

◆鈎形の規格性からみた法律位階推定法の確立
代表者・松村恵司 基盤研究（C）（2）継続
平城京の銅鏡にみられる規格性が、全国出土の銅鏡に貫徹し、その寸法差が位階に対応するか否かの検討を目的とした研究。最終年の本年度は、3ヶ月の研究成果をまとめるべく、2000年11月16・17日に研究集会「鈎形をめぐる諸問題」を開催し、研究者間で位階表示機能の存否をめぐる討議を行った。全国出土銅鏡集成は約2000点に達し、あわせて海外の関連資料も収集した。集会記録は来年度に刊行予定。

◆馬具副葬品古墳の階層性と地理的分布に関する研究
代表者・花谷 浩 基盤研究（C）（2）継続
中期以降の古墳で、副葬品の中に馬具を含むものと無いものがある。しかも、馬只を副葬する古墳の数は地域によって大きな偏差があることが知られている。この現象が何に起因するのかを知りたいと思った。馬具副葬古墳の資料を収集しデータベース化をおこなうと、数と規模は地域や古墳群によつていくつかのパターンにわかれ、古墳数の少ない地域では大型古墳に集中するケースがある。これらは、各地域での権力構造や軍事編成に直結する可能性が高い。

◆日本庭園・庭園史用語の英語訳に関する研究
代表者・小野健吉 基盤研究（C）（2）継続

三年間にわたる研究の最終成果として、『和英対照日本庭園用語辞典』（Bilingual [Japanese & English] Dictionary of Japanese Garden Terms）を刊行した。本書の見出し項目は、552項目。各項目は、見出し項目を和文・和文訓読み（ひらがな）・ローマ字・英文で示し、解説文を和文および英文で付し、必要に応じて図版を添えた。300部を自刷し、国内外の関連研究機関・研究者に配布した。また、米国・ハーバード大学ダンバートンオックス研究所およびニュージーランド・リンカーン大学で研究成果公表をおこなった。

◆古代東アジアにおけるガラス生産の基礎研究
代表者・川越俊一 基盤研究（C）（2）継続

今年度は、日韓出土のガラス製品の比較検討の為、関係資料を収集し、一部データベース化するとともに、韓国出土のガラス製品、砲弾ガラス増量、小玉用鋳型を実見し、調査をおこなった。韓国出土については約100遺跡からの出土資料の整理を終したが、日本出土品は莫大な量に及ぶ為、西日本出土品を中心に整理作業を進めている。

◆弥生時代タタキ技法の波及経路

代表者・深澤芳樹 基盤研究（C）（2）継続
本年度は、本研究の第2年目にあたり、さらなる資料の充実をはかった。日本国内での検討はもとより、大韓民国でも両海岸部と西海岸部を訪ね、研究者との意見交換をおこない、あわせて資料を見学した。その結果、弥生土器のタタキ技法は、碑半島西南部地域の土器に同一の技法があつて、これに由来する可能性が高いことが判明した。

◆歴史的な建物の活用にともなう保存修復の具体的なあり方の研究 一事例集と指針の作成－

代表者・木村 勉 基盤研究（C）（2）継続
活用をともなう近代建築を主とした指定文化財全般の歴史的建造物の修復を対象にして、あらためて保存の基本理念を整理・確認するとともに、活用事例を具体的修復方法に及んで分析し、検討のうえ保存修復の適切なあり方を指針案として示した。

◆古代ガラスの色調と材質に関する科学的研究

代表者・肥塚隆保 基盤研究（C）（2）継続
本年度は日本で出土しているインド・パシフィック系ビーズに着目した調査・研究をおこなった。ムササは弥生時代後期の遺跡から少量が出土しており、高アルミナゾーダイトがラズで作られている。インド・アリカメドウを起源とすると推定された。

◆超臨界点乾燥法を用いた有機質遺物の新規保存処理法の開発

代表者・高妻洋成 基盤研究（C）（2）継続
出土木材を超臨界点乾燥法により保存処理するための最適条件を検討するため液化炭酸流量と乾燥度の関係を検討した。冷却した液化炭酸を流入させ、100気圧昇圧後40℃まで昇温して所定時間静置した後凍結した場合は、含水率の高い出土木材の方が乾燥しやすいくこと、および所定時間液化炭酸を流逝させたあと滅菌した場合には液化炭酸の量が多いほど乾燥が進むことが明らかとなった。

◆古代金属糸の材質と製作技法の歴史的変遷に関する材料科学的研究

代表者・村上 隆 基盤研究（C）（2）継続
金属糸の歴史的変遷を探るために、現代の金糸の製作技法を調査した。また、わが国で出土した古代金糸の製作技法の背景には、厚さ10～30μmの金製薄板製作の重要性があることを確認することができた。さらに、繩型の金製耳環が金薄板を応用した製作技法によつて作られていることをはじめて解明し、これを「金薄板積層形成法」と名づけた。

◆日本古代宮都の官衙配置の研究

代表者・渡邊晃宏 基盤研究（C）(2) 新規

平城宮の官衙配置を考察する基礎資料として、木簡・墨書き図を始めとする出土文字資料のうち、宮城の構造を考える素材となる史料を抽出して整理する作業をおこない、出土遺構と合わせて当該地の性格を考察した。また、統日本紀など奈良時代の文書史料から、平城宮などの都域関連史料を抽出する作業をおこなった。

◆古代の非鉄金属生産の考古学的研究

代表者・小池伸彦 基盤研究（C）(2) 新規

本研究は、古代手工業生産の基盤を支えていた金・銀・銅・鉛・錫・アンチモン地金の生産様式の解明を目的とする。今年度は佐渡西三川砂金产地、対州越山、伊予市之川越山等の踏査を実施、関連資料を収集した。また、長登鍋山跡・平原第1遺跡出土の鉛製錠・精錬関連資料の調査をおこない、検討を加えた。

◆古代の穀類収取に関する考古学的研究

代表者・山中敏史 基盤研究（C）(2) 新規

都衛正倉および古代豪族居宅関係遺跡について、調査報告書掲載の總柱高床倉庫遺構のデータを収集することとともに、柱穴の形状に留意した七木工法の顕性説分の作業を始めた。また、穀類収納倉庫の具体的な規模・構造などのわかる文献資料や木簡の収集作業を進め、一部「都衛正倉関係史料集」（『都衛正倉の成立と変遷』（奈良国立文化財研究所刊行））として公表した。

◆中世室生寺の復興

代表者・箱崎和久 奨勵研究（A） 新規

北京律僧である空智房空（1232～1318）は、後宇多法皇の帰依を受け、延慶元年（1308）に室生寺灘頂堂を建立した。舍利信仰の高揚とともに復興する室生寺は、忍空の人脈により、関東の北京律寺院とも密接な関係があると考えられる。

◆古墳時代における軍事組織形成過程の研究

代表者・豊島直博 奨勵研究（A） 繙続

古墳から出土した鉄製武器を集める作業を進め、実測図の作成と写真撮影をおこなった。畿内では武器の変遷を明らかにし、畿外以外の地域でも、武器の形態や組み合わせの変化に畿内との共通性を確認した。ただし、古墳時代前期における武器の副葬量や、中期における武器副葬占墳の規模や分布には地域差が見られ、軍事組織の地域差について考察する手がかりを得た。

学会・研究会等の活動

◆木簡学会研究集会

2000年12月2・3の両日、第22回木簡学会研究集会が奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館講堂においておこなわれた。2日は、何双全「敦煌懸泉置遺跡の発掘－漢代の駅と木簡」、犬飼隆「7世紀木簡の国語歴史的義」の2本の研究報告、3日は、山下信一郎「2000年全国出土の木簡」、清水みき「長岡京東院跡出土の木簡」、湯川善一「石川県津幡町加茂遺跡出土の木簡」の3本の事例報告があった。また、「木簡研究」第22号を刊行した。（編集担当 吉川 啓）

（渡邊晃宏）

◆条里制・古代都市研究会

2001年3月3～4日の両日、第17回条里制・古代都市研究会大会が奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館講堂にて開催された。3日は、「大宰府・多賀城・斎宮一調査・研究の最前線ー」を大会テーマとして、今泉隆雄「多賀城の創建ー郡山遺跡から多賀城へー」、井上信正「古代大宰府街区の変遷」、中山章「斎宮の「都市」計画一方格地割の計画方法ー」の3本の研究報告とコメント、討議がおこなわれた。4日には、徳島市觀音寺遺跡（阿波國府推定地）、滋賀県草津市野路岡田遺跡、石川県津幡町加茂遺跡、長岡京右京六条一坊、平安京右京三条二坊十六町の発掘調査成果が報告された。

（山中敏史）

◆埋蔵文化財写真技術研究会

2000年7月7～8日に第12回総会および研究会をおこなった。

7月7日：総会 参加者146名（含む委任状）・講演参加者79名「デジタルカメラのメリット、デメリット」（川瀬敏雄氏：（株）堀内カラー）

7月8日：講演 参加者126名「銀塩のオリジナル性とデジタルの多様性」（大橋正清氏；（株）日本写真印刷）「報告書レイアウトの実際」（戸村雅英氏；（株）ドラマックス）・公開講座「デジタル・アナログ疑問点」（玉内公一氏：コメット（株））

本年の研究会では報告書印刷におけるデジタル技術の適用や利用範囲など、主にデジタル技術の利用に関して発表・討議をおこなった。

（中村一郎）

2 研修・指導と教育

埋蔵文化財センターの研修と指導

文化財の保存・活用を推進し、国民に対するサービスの向上を図るため、地方公共団体職員等に対する研修を実施している。今年度開催した課程数は、14課程であり、一般研修を1課程、専門研修として8課程を、そして特別研修5課程を開催した。総受講者数は、263名であった。また、遺跡学をめざした遺跡の保存と活用に関する特別講座を開講した（研修一覧参照）。

そのほかにユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所主催のアジア・太平洋地域文化遺産保護調査修復研修に関わる協力として、2000年11月14日～12月15日の間、受講者15名に対して、遺跡探査・保存科学概説および実習等を実施したほか、個人研修として、ネパール1名（10月20日～10月31日）、ミャンマー1名（11月20日～12月20日）、および中国1名（11月8日～12月23日）の研修を実施、協力した。

さらに、地方公共団体等の関係機関に対する指導・助言等の協力をおこなった。今年度は、地方公共団体等がおこなう史跡等の整備事業に対する専門的・技術的指導・助言は約151件であった。



環境考古学研修風景

■ 2000年度 埋蔵文化財発掘技術者等研修課程一覧

区分	課 程	実 施 期 日
一 般 研 修	一般課程	6月22日～7月28日
	保存科学課程	5月18日～6月2日
	文化財写真課程	8月17日～9月20日
専 門 研 修	測量外注管理課程	9月26日～10月6日
	遺跡環境調査課程	10月17日～10月26日
研 修	遺跡保存整備課程	11月1日～11月29日
	寺院遺跡調査課程	12月5日～12月15日
	報告書作成課程	1月10日～1月19日
	生産遺跡調査課程	2月15日～2月27日
特 別 研 修	埋蔵文化財基礎課程	6月8日～6月16日
	信仰関連遺跡調査課程	5月9日～5月12日
	遺跡地図情報課程	12月21日～12月26日
	遺跡写真課程	1月25日～1月31日
	写真測量外注管理課程	2月6日～2月8日

定 員	対 象	内 容
24名	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者で、発掘調査の経験が十分でない者	遺跡の発掘調査を進めるために必要な基礎的知識と技術の研修
16名	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者で、一般研修修了者又はそれと同程度の経験を有する者	遺物の保存に関する保存科学的な専門的知識と技術の研修
16名	"	埋蔵文化財の写真撮影等に関して必要な専門的知識と技術の研修
16名	"	外注管理に必要な測量基礎の実習と仕様書の作成などに必要な専門的知識の研修
16名	"	遺跡の発掘において、第四紀学の成果を用いて過去の自然環境を推定復原する方法を学ぶ研修
16名	"	遺跡の保存整備に関して必要な専門的知識と技術の研修
24名	"	古代寺院の調査研究に関して必要な専門的知識と技術の研修
24名	"	見やすく読みやすい報告書の作り方と、図録・学術誌収集の基礎に関する研修
24名	"	生産遺跡の調査法と、その成果をもとにした工房復原の手順・方法を学ぶ研修
30名	地方公共団体の埋蔵文化財担当の事務系職員若しくはこれに準ずる者	埋蔵文化財行政を担当するうえで必要な遺跡・遺物に関する基礎的知識の研修
30名	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者で、一般研修修了者又はそれと同程度の経験を有する者	考古学から宗教を復原するために必要な専門知識と学問的手続を研修
30名	"	埋蔵文化財の調査研究へのGISの応用に関する基礎的知識の研修
16名	"	発掘調査に必要な写真撮影の技術を習得するための研修
30名	"	写真測量による地形図・遺構図を外注した際の成果品の評価等に必要な基礎的知識の研修

2000年度 日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧
 (委員として指導・協力しているものに限る)

- (北海道) 網走市史跡等 フゴッペ洞窟 北黄金貝塚
 常呂町史跡 カリンバ3遺跡
- (青森県) 五所川原須恵器窯跡群 三内丸山遺跡
 総合運動公園遺跡ゾーン
- (岩手県) 西方寺毘沙門堂 御所野遺跡 柳之御所遺跡
 盛岡城跡
- (宮城県) 多賀城跡
- (秋田県) 伊勢堂岱遺跡 大湯環状列石 払田柵跡
- (福島県) 宮畠遺跡 長井前ノ山古墳 夏井廃寺範囲確認
 福島県文化財センター安達館基本計画
- (茨城県) 平沢官衙遺跡
- (栃木県) 上神主・茂原遺跡
- (新潟県) 県立歴史博物館総合研究 県立歴史博物館展示
- (富山県) 桜町遺跡
- (石川県) 真脇遺跡 七尾城跡 真脇遺跡出土繩文土器
 加茂遺跡出土木製品
- (福井県) 一乗谷朝倉氏遺跡 烏浜貝塚出土木製品
 小浜市埋蔵文化財遺物 向山古墳出土品 国吉城址
- (岐阜県) 美濃國府跡 昼飯大塚古墳 柿田遺跡
- (静岡県) 県史跡・考古資料 新居関跡 登呂遺跡 藤枝市史編さん
 横須賀城跡 長浜城跡 県指定文化財
 西の谷遺跡出土銅鏡
- (愛知県) 小長曾陶器窯跡 三河国分尼寺跡
 愛知県埋蔵文化財 吉胡貝塚
- (三重県) 上野遺跡 宝塚古墳 天白遺跡 梅田遺跡
 赤木城跡平子刑場跡 長者屋敷遺跡 名谷遺跡
- (滋賀県) 近江国庁跡 安土城跡 野路小野山製鉄遺跡
 彦根城跡 宮町遺跡 紫香楽宮跡 斎山飾金具
- (京都府) 恭仁宮跡 鹿苑寺修羅 高麗寺跡
 椿井大塚山古墳 赤坂今井墳丘墓 長岡京跡
- (大阪府) 堺市土塔 今城塚古墳 新堂廃寺
- (兵庫県) 新宮宮内遺跡 赤穂城跡 赤穂城跡二の丸鶴形池跡
 西条古墳群史跡 姫路城内曲輪御殿群 栗鹿遺跡
 新方遺跡出土自然遺物 梅田東古墳群出土遺物
 山名氏城跡
- (奈良県) 藤ノ木古墳 酒船石遺跡 頭塔 キトラ古墳
- (鳥取県) 上淀庵寺跡出土壁画塑像 上原遺跡 妻木晚田遺跡
 大御堂庵寺 伯耆古代の丘 新井三嶋谷墳丘墓

- (島根県) 荒島古墳群 出雲大社境内遺跡 三瓶埋没林
 加茂岩倉遺跡銅鏡 石見銀山遺跡 出雲國府跡
 斎伊川放水路 海上遺跡 古志本郷遺跡
 西谷墳墓群等 出雲国分寺跡 出雲郡家房連遺跡群
- (岡山県) 鬼城山 備中松山城跡 津山城跡
- (広島県) 安芸国分寺跡 府中市埋蔵文化財
- (山口県) 大内氏館跡 小野田セメント徳利窯 周防国府跡
 (徳島県) 阿波国分尼寺跡 阿波国府跡関連遺構 矢野遺跡
- (香川県) 有岡古墳群 宗吉瓦窯跡
- (媛媛媛) 来住庵寺跡 宇和島城跡
- (福岡県) 太宰府跡 鴻臚館跡 三雲遺跡等
- (佐賀県) 歴史資料館 佐賀城公園歴史の森 西九州自動車道
 肥前国府跡 名護屋城並びに陣跡
- (長崎県) 双六古墳 原の辻遺跡 原城跡 対馬藩主宗家墓所
 鷹島海底遺跡
- (熊本県) 大村横穴群 松山遺跡
- (大分県) 白杵磨崖仏 亀塚古墳 大田村重要文化財宝塔
 国東町地方拠点史跡等総合整備史跡
- (宮崎県) 日向国衙跡
- (鹿児島県) 西田橋解体復元
 水追遺跡出土後期旧石器時代住居構造
- (沖縄県) 那覇市新都心整備事業資料整理調査報告書作成
 ドイツ皇帝博愛記念碑

京都大学大学院の教育

京都大学大学院人間・環境学研究科 文化地域・地域環境学専攻 環境発展論講座において、住環境保全論（山中敏史、浅川滋男）、考古環境学論（田辺征夫）、文化財保存科学論（大田正昭）、文化財保存調査法論（光谷拓実、松井一章）等に関する講義、およびそれらに関する演習および実習をおこなった。なお、講義は京都大学と奈良国立文化財研究所において実施し、演習および実習は主として奈良国立文化財研究所の各担当教官の研究室において開催した。



京都大学大学院生との記念撮影（文化財資料棟にて）

奈良女子大学大学院の教育

奈良女子大学大学院人間文化研究科（博士後期課程）との連携では、比較文化学専攻文化史論講座の3科目を受け持っている。歴史考古学特論（花谷 浩）、宗教考古学特論（金子裕之）、歴史資料論（渡邊晃宏）である。歴史考古学では6・7世紀の寺院や瓦礫の諸問題、宗教考古学では律令的祭祀の諸問題、歴史資料では木簡の諸問題を講じており、それぞれ講義は飛鳥・藤原京、平城京跡や諸寺院などの発掘資料を前におこなっている。貴重な資料を眼にしながらの講義はまことに「贊沢」であり、まさに奈文研ならではの講義といえよう。

3 遺跡整備・復原事業と展示

平城宮跡・藤原宮跡の整備

平城宮跡案内板設置工事

平城宮跡サイン計画に基づき、拠点集合サイン1基、遺構解説サイン3基および道標4基、平城宮跡地図サイン（路面埋込型）4基を設置した。

拠点集合サインは、平城宮の鳥瞰図、平城宮跡地図、平城宮跡の説明文、資料館の案内などを焼付けた陶板を鉄筋コンクリートの躯体に貼り付け、花崗岩切石で外装を施したもので、中規模案内板の役割を持つ。主要な入口に設置する予定だが、今回は、平城宮跡資料館の南側で平城宮跡西面中門跡北入り口付近に設置した。

遺構解説サインは、イラストと説明文（和文・英文）を焼付けた陶板をコンクリート躯体に貼り付け、凝灰岩切石で外装したもので、その場所の推定復原図や推定使用状況などを説明している。設置場所は、大膳職、造酒司の井戸跡、式部省である。

道標は、目的地の行先方向を示す陶板を、鉄筋コンクリートリシリコン吹付仕上げをおこなった躯体に貼り付けたものである。また、平城宮跡地図サインは、現在地を示した平城宮跡の地図陶板をコンクリートの基礎の上に貼り付け、花崗岩切石の縁取りを施し、道標前の床面に設置したものである。設置場所は、第一次大坂殿院西側、東側2基、朱雀門東側、式部省の東南部である。工事費は、4,800千円であった。

宮内省築地復原工事

2000年度は、前年度施工済みの築地塀の延長工事で、西面と南面の接合部、西面および南面東端部を施工した。今回初めてコーナー部の施工となったことから、入隅および出隅に柱を設け、L字型を一体として版築の築成をおこなうなどの工法を採用した。また、築地塀の作業方法は先に復原した手法にならったが、仕様については、版築の施工性、仕上がり、耐久性などを探るために前工事で施工した結果を参考に新たに3種類の配合（土：にがり：石灰=1:0.08:0.07、1:0.08:0.05及び1:0.05:0）で築地塀（西面築地の南端から北へ7スパン（33.6m）、さらに北へ5スパン延長（24m）計10スパン（48m）及び南面東端部1スパン（4.8m）を完成させた。今後、長期にわたって観察していく予定である。総工事費は、200,025千円であった。

朱雀門管理施設新設工事

公開している朱雀門の脇部に案内所と警備員控室の機能を備えた朱雀門案内所を完成させた。また、バリアフリー対策として、朱雀門基壇への見学者導線を考慮し、これまで全面化粧砂利敷きであったところに見学用通路部の舗装をおこなった。舗装には、既存の化粧砂利敷きと違和感のないよう同種の砂利を使用した自然色舗装を採用した。さらに、案内所の奥にある六門を通りぬけた北側にスロープを設け、朱雀門基壇上に車椅子も登れるように整備した。スロープは大垣に沿わした形とし、景観上も目立たないように大垣と同系色の塗装をおこなった。スロープは復原展示物ではないので、不要時に撤去できるよう分割可能なものとした。なお、案内所を含め朱雀門と一緒に管理するため外周柵を拡張し、夜間の機械警備範囲に組み入れた。工事費は、110,775千円であった。

東院庭園隅楼復原等工事

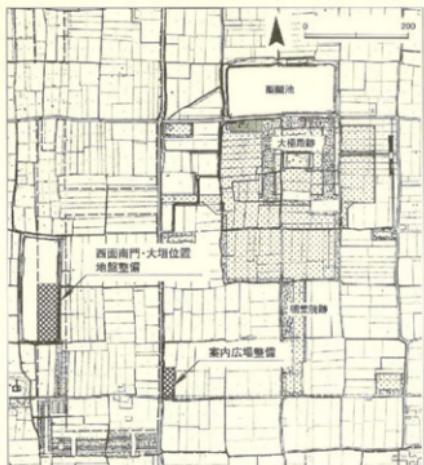
今年度は、東院庭園内の北西部の復原整備で、流盃渠および板塀の復原表示をおこなった。流盃渠は、遺構の直上で、遺構に習い、主に宮跡内発掘調査で転石として集めていた石材（通称：カナンボ石）を再利用し、不足分は外部から調達した石材を補充して復原をおこなった。流盃渠の側石は2段組の形状で、上流には皿形の溜水池を備え、蛇行溝に流下し、最下流部の池への接続が不明確なため池岸上面から流し込むように接続した。板塀は、4種類（ツバキ・シキミ・サカキ・タチバナ）の混植生け垣で表示した。周囲は強芝や植栽、見学用通路は、從前どおりソイルセメント舗装をおこなった。東院庭園外周では、条間側溝の復原表示の延長（59m）および外周柵を拡張し、夜間の機械警備範囲に組み入れた。工事費は、102,585千円であった。

藤原宮跡の整備

本年度、藤原宮跡では、西面南門位置周辺の地盤造成および宮西南部の案内広場の設置を実施した。

西面南門は、現在の縄手池東南部付近にあったことが発掘調査で明らかにされている。この西面南門およびそこから北に延びる西面大垣の遺構表示をおこない、一帯を活用に供するため、縄手池の東南部を埋め立てる地盤造成をおこなった。埋め立てによって、南北延長約70mにわたり既存堤防から東へ15m内外の平坦面を確保、次年度以降の西面南門等の遺構表示のための基盤を整えた。なお、護岸は縄手池の他の部分と同様のコンクリートブロック張りとし、造成平坦面の池側端部には、利用者の安全をはかるため人止め柵を設けた。

案内広場は、南部を藤原宮跡で從来設置されてきた碎石敷きの多目的広場（面積310m²）とし、北部を植栽を取り入れた芝生広場（面積534m²）とした。植栽にあたっては、クロマツ・イロハモミジ・シダレヤナギ・ヤマザクラ・ネムノキ・ウメ・ヤブツバキ・アセビ・ヤマハギ・ヤマツツジなど万葉集に歌われた植物を、季節性も考慮しながら選択した。この広場の北方には、権原市立鶴公小学校があり、将来的には万葉植物の学習に用いてもらうことも想定している。また、碎石敷き広場に3基、芝生広場に1基の縁台を設置し、利用者の休息に供した。



2000年度 藤原宮跡整備位置図

特別史跡山田寺跡の整備

1999年度に引き続き、第2次山田寺跡整備事業（2ヵ年）を文化庁からの支出委事業として実施した。本年度実施した事業は、東面回廊3間分（北から13～15間目）の基壇復元の完成、東面大垣の盛土表示の延長、南門南の参道の表示、ならびに案内広場とそこへの通路の新設である。

このうち、東面回廊は、昨年度に基壇造成および内側の礎石4個を復元したが、今年度は、外側礎石4個と地墳石の復元および回廊床面の自然色舗装を行った。礎石は遺構本来の石材である花崗岩（飛鳥石）を、地墳石は遺構本来の石材に近似した安山岩を材料として用いた。また、案内広場は、利用者への情報提供ならびに休息の場所として、中心伽藍北東方の現道沿いに設けたもの。広場は実効面積約400m²。脱色アスファルト舗装とし、周囲には植栽帯を設け、多目的に使える縁台3基を置いた。広場東部の総合説明板は、基台の上に石材を立てフレームとし、そこに山田寺復原イラストと和文・英文の説明を焼き付けた陶板をはめ込んだ。

本庁舎3階大会議室改修工事

2001年度から奈良国立文化財研究所と東京国立文化財研究所が統合し、独立行政法人文化財研究所となることになった。そして、法人本部を奈良に置くことが決定したことから、奈文研本庁舎の3階にあった大会議室、小会議室、準備室を撤去し、法人本部事務室に改修することになった。今回の改修工事で、理事長室、応接室、監事室、会議室、総務部長室および総務課室を設置した。各室入りに支障がないよう通路は中央に設け、南側各室が線路沿いでもあることから、防音対策を施しつつ、窓を多くして採光を考慮した。工事費は、37,800千円であった。

平城宮跡資料館改修工事

独立行政法人化とともに組織編成や人員配置の変更に関連し、既存施設の有効活用や一般公開展示施設の充実のために平城宮跡資料館の改修工事をおこなった。これまで展示室の中ほどにあった事務室を平城宮跡資料館建物内の北西部に移転することとし、事務室跡を平城宮跡に関する映像や提示のためのビデオルーム室に改修する工事をおこなった。また、資料館内にある休憩室について、ブラインドや自動販売機を設置し、見学者へのサービスの向上を図った。工事費は、10,815千円であった。

飛鳥資料館特別展

◆春期特別展示「あすかの石造物」

2000年4月11日～5月23日

かつて飛鳥が日本の首都だった時代に作られた石造物は、繁栄をきわめた都がこの地を去った後も、往時をしのぶ歴史の証人として、村のあちこちに、その不思議な姿をとどめ、歴史学者やこの地を訪れる多くの人々の关心の対象となってきた。

当館が「飛鳥の石造物」展を開き、飛鳥地域に残されたこうした石のモニュメントを紹介して以来、既に10年以上の歳月が流れた。

時代の推移とともに、この地域の遺跡をとりまく環境もそれなりの変貌をみせ、「謎」とされてきた「石造物」も、あらたな発掘調査によって、その性格が更にはっきりと捉えられるようになった例が少なくない。とくに酒船石とそれをとりまく遺跡に関しては、最近のいくつかの調査で新発見が続々、とりわけ明日香村教育委員会の酒船石遺跡北側の発掘では、齐明天皇の兩棲宮との関連を示すと考えるこのうえなく重要な遺構が出土し、広く社会の耳目を集めている。

こうした調査結果と前回の特展以来、継続してきたこれまでの石造物復原の作業を広く一般に紹介し、新知見をもとに、もう一度飛鳥の石造物全体を見直してみる一つの機会として、明日香村教育委員会と共に開催した。



飛鳥資料館、春・秋の特別展ポスター

◆秋期特別展示「飛鳥池遺跡」

2000年10月3日～11月26日

たとえば、日本書記を読めば、天皇や貴族の生活に関して、ある程度情報を得ることはできる。しかし、国民の大多数を占めていた庶民の日常については、全くといつていひほど何も語ってはくれない。飛鳥時代の遺跡の多くも、上層階級の生活にかかわるものがほとんどである。庶民の家やいろいろな職人の仕事場は、後に削りとられ、失われてしまうのが普通だからである。

飛鳥池遺跡は、運よく現代に残された古代の生産活動の跡であり、往時の職人の日々の仕事の実態を、今に伝える数少ない遺跡なのである。そしてまた、古代の宮殿や寺院などで使われた、さまざまな製品が、どんな場所でどのように作られたのかを、具体的に教えてくれる、貴重な遺跡である。この遺跡ではわが国最初の銅貨・富本銭の鋳造跡がみつかっているが、そのほかにも、金銀、ガラス、鉄、銅、漆など各種の工房が軒を並べていた。日本の古代文化を考えいくうえで、飛鳥池遺跡は、天皇の宮殿や大寺院と同じじかあるいはそれ以上に、大きな意味と価値をもった、歴史の証人といふことができる。

このたび、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が実施した調査の結果、明らかになった遺跡の全貌と、多様な出土遺物とを、紹介する展示会を開催した。



4 その他

これまでの刊行物

奈良国立文化財研究所学報

- 第 1 冊 仏師連慶の研究(1954)
 第 2 冊 修学院離宮の復原的研究(1954)
 第 3 冊 文化史論叢(1955)
 第 4 冊 奈良時代僧房の研究(1956)
 第 5 冊 飛鳥寺発掘調査報告(1957)
 第 6 冊 中世庭園文化史(1958)
 第 7 冊 興福寺食堂発掘調査報告(1958)
 第 8 冊 文化財論叢(1959)
 第 9 冊 川原寺発掘調査報告(1959)
 第 10 冊 平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告(1960)
 第 11 冊 院の御所と御堂—院家建築の研究—(1961)
 第 12 冊 巧匠阿弥陀仏快慶(1962)
 第 13 冊 寝殿造系庭園の立地的考察(1962)
 第 14 冊 唐招提寺藏「レース」と「金龜舍利塔」に関する研究(1962)
 第 15 冊 平城宮発掘調査報告 II 官衙地域の調査(1962)
 第 16 冊 平城宮発掘調査報告 III 内裏地域の調査(1963)
 第 17 冊 平城宮発掘調査報告 IV 官衙地域の調査(1965)
 第 18 冊 小堀遠州の作事(1965)
 第 19 冊 藤原氏の家とその院家(1967)
 第 20 冊 名物烈の成立(1969)
 第 21 冊 研究論集 I(1971)
 第 22 冊 研究論集 II(1973)
 第 23 冊 平城宮発掘調査報告 VI 平城京左京一条三坊の調査(1974)
 第 24 冊 高山一町並調査報告—(1974)
 第 25 冊 平城京左京三条二坊(1975)
 第 26 冊 平城宮発掘調査報告 VII(1975)
 第 27 冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 I(1975)
 第 28 冊 研究論集 III(1975)
 第 29 冊 木曾奈良井一町並調査報告—(1975)
 第 30 冊 五條一町並調査の記録—(1976)
 第 31 冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 II(1977)
 第 32 冊 研究論集 IV(1977)
 第 33 冊 イタリア中部の山岳集落における民家調査報告(1977)
 第 34 冊 平城宮発掘調査報告 IX(1977)
 第 35 冊 研究論集 V(1978)
 第 36 冊 平城宮整備調査報告 I(1978)
 第 37 冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 III(1979)
 第 38 冊 研究論集 VI(1979)
- 第 39 冊 平城宮発掘調査報告 X(1980)
 第 40 冊 平城宮発掘調査報告 XI(1981)
 第 41 冊 研究論集 VII(1984)
 第 42 冊 平城宮発掘調査報告 XII(1984)
 第 43 冊 日本における近世民家(農家)の系統的発展(1984)
 第 44 冊 平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告(1985)
 第 45 冊 葉室寺発掘調査報告(1986)
 第 46 冊 平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書(1988)
 第 47 冊 研究論集 XIII(1988)
 第 48 冊 年輪に歴史を読む—日本における古年輪学の成立—(1990)
 第 49 冊 研究論集 IX(1991)
 第 50 冊 平城宮跡発掘調査報告書 XIII(1991)
 第 51 冊 平城宮跡発掘調査報告書 XIV(1992)
 第 52 冊 西隆寺発掘調査報告書(1992)
 第 53 冊 平城宮朱雀門の復原的研究(1993)
 第 54 冊 平城京左京二条二坊・三条二坊
 —長屋王邸・藤原麻呂邸—発掘調査報告(1994)
 第 55 冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 IV—飛鳥水落遺跡の調査—(1994)
 第 56 冊 平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告(1996)
 第 57 冊 日本の信仰遺跡(1998)
 第 58 冊 研究論集 X(1999)
 第 59 冊 中世瓦の研究(1999)
 第 60 冊 研究論集 XI(1999)
 第 61 冊 研究論集 XII(2000)
 第 62 冊 史跡頭塔発掘調査報告(2000)

奈良国立文化財研究所史料

- 第 1 冊 南無阿弥陀仏作善集(複製)(1954)
 第 2 冊 西大寺敷尊伝記集成(1955)
 第 3 冊 仁和寺史料 寺誌編 I(1963)
 第 4 冊 俊乗坊重源史料集成(1964)
 第 5 冊 平城宮木簡 1 図版(1966)
 第 6 冊 仁和寺史料 寺誌編 II(1967)
 第 5 冊 平城宮木簡 1 解説(別冊)(1969)
 第 7 冊 唐招提寺史料 I(1970)
 第 8 冊 平城宮木簡 2 図版・解説(1974)
 第 9 冊 日本美術院彫刻等修理記録 I(1974)
 第 10 冊 日本美術院彫刻等修理記録 II(1975)
 第 11 冊 日本美術院彫刻等修理記録 III(1976)
 第 12 冊 藤原宮木簡 1 図版・解説(1977)
 第 13 冊 日本美術院彫刻等修理記録 IV(1977)
 第 14 冊 日本美術院彫刻等修理記録 V(1978)

- 第15冊 東大寺文書目録第1巻(1978)
 第16冊 日本美術院彫刻等修理記録VI(1979)
 第17冊 平城宮木簡3 図版・解説(1979)
 第18冊 藤原宮木簡2 図版・解説(1979)
 第19冊 東大寺文書目録第2巻(1979)
 第20冊 日本美術院彫刻等修理記録VII(1980)
 第21冊 東大寺文書目録第3巻(1980)
 第22冊 七大寺巡礼私記(1981)
 第23冊 東大寺文書目録第4巻(1981)
 第24冊 東大寺文書目録第5巻(1982)
 第25冊 平城宮出土墨書き土器集成I(1982)
 第26冊 東大寺文書目録第6巻(1983)
 第27冊 木器集成図録—近畿古代編—(1984)
 第28冊 平城宮木簡4 図版・解説(1985)
 第29冊 興福寺典籍文書目録第1巻(1985)
 第30冊 山内清男考古資料I(1988)
 第31冊 平城宮出土墨書き土器集成II(1988)
 第32冊 山内清男考古資料2(1989)
 第33冊 山内清男考古資料3(1991)
 第34冊 山内清男考古資料4(1991)
 第35冊 山内清男考古資料5(1991)
 第36冊 木器集成図録—近畿原始編—(1992)
 第37冊 梵鏡実測図集成(上)(1992)
 第38冊 梵鏡実測図集成(下)(1993)
 第39冊 山内清男考古資料6(1993)
 第40冊 山田寺出土建築部材集成(1994)
 第41冊 平城京木簡1 長屋王家木簡1(1994)
 第42冊 平城宮木簡5 図版・解説(1995)
 第43冊 山内清男考古資料7(1995)
 第44冊 興福寺典籍文書目録第2巻(1995)
 第45冊 北浦定政関係資料(1996)
 第46冊 山内清男考古資料8(1996)
 第47冊 北魏洛陽永寧寺(1997)
 第48冊 発掘庭園資料(1997)
 第49冊 山内清男考古資料9(1997)
 第50冊 山内清男考古資料10(1998)
 第51冊 山内清男考古資料11(1999)
 第52冊 地域文化財の保存修復 考え方と方法(1999)
 第53冊 平城京木簡2 長屋王家木簡2(2000)
 第54冊 山内清男考古資料12(2000)

奈良国立文化財研究所基準資料

- 第1冊 瓦編1 解説(1973)
 第2冊 瓦編2 解説(1974)
 第3冊 瓦編3 解説(1975)
 第4冊 瓦編4 解説(1976)
 第5冊 瓦編5 解説(1976)
 第6冊 瓦編6 解説(1978)
 第7冊 瓦編7 解説(1979)
 第8冊 瓦編8 解説(1980)
 第9冊 瓦編9 解説(1983)

飛鳥資料館図録

- 第1冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏(1976)
 第2冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 銘文篇(1976)
 第3冊 日本古代の墓誌(1977)
 第4冊 日本古代の墓誌 銘文篇(1978)
 第5冊 古代の誕生仏(1978)
 第6冊 飛鳥時代の古墳—高松塚とその周辺—(1979)
 第7冊 日本古代の鶴尾(1980)
 第8冊 山田寺展(1981)
 第9冊 高松塚拾作(1982)
 第10冊 渡来人の寺—松隈寺と坂田寺—(1983)
 第11冊 飛鳥の水時計(1983)
 第12冊 小建築の世界—埴輪から瓦塔まで—(1983)
 第13冊 藤原宮—半世紀にわたる調査と研究—(1984)
 第14冊 日本と韓國の塑像(1985)
 第15冊 飛鳥寺(1985)
 第16冊 飛鳥の石造物(1986)
 第17冊 萬葉乃衣食住(1987)
 第18冊 廿申の乱(1987)
 第19冊 古墳を科学する(1988)
 第20冊 聖德太子の世界(1988)
 第21冊 仏舍利埋納(1989)
 第22冊 法隆寺金堂壁画飛天(1989)
 第23冊 日本書紀を掘る(1990)
 第24冊 飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察(1991)
 第25冊 飛鳥の源流(1991)
 第26冊 飛鳥の工房(1992)
 第27冊 古代の形(1994)
 第28冊 蘇我三代(1995)
 第29冊 齋明紀(1996)
 第30冊 遺跡を測る(1997)

- 第31冊 それからの飛鳥(1998)
 第32冊 UTAMAKURA(1998)
 第33冊 幻のおおでら—百濟大寺(1998)
 第34冊 鏡を作る 海獣葡萄境を中心として(1999)
 第35冊 あすかの石造物(1999)
 第36冊 飛鳥池遺跡(2000)

飛鳥資料館カタログ

- 第1冊 仏教伝来飛鳥への道(1975)
 第2冊 飛鳥の寺院遺跡1—最近の出土品(1975)
 第3冊 飛鳥の仏像(1978)
 第4冊 桜井の仏像(1979)
 第5冊 高取の仏像(1980)
 第6冊 樅原の仏像(1981)
 第7冊 飛鳥の王陵(1982)
 第8冊 大官大寺—飛鳥最大の寺—(1985)
 第9冊 高松塚の新研究(1992)
 第10冊 飛鳥の一と—最近の調査から—(1994)
 第11冊 山田寺(1997)
 第12冊 山田寺東回廊再現(1997)

人事異動 (2000.4.1~2001.3.31)

● 2000年4月1日	關 一
庶務部会計課課長補佐に昇任	江川 正
庶務部会計課経理係経理主任に転任	豊島 直博
平城宮跡発掘調査部考古第一調査室に配置換	神野 恵
平城宮跡発掘調査部考古第二調査室に採用	馬場 城
平城宮跡発掘調査部史料調査室に採用	西口 寿生
飛鳥藤原宮跡発掘調査部遺構調査室長に昇任	玉田 芳英
飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官に配置換	箱崎 和久
飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第一調査室に配置換	山下信一郎
飛鳥藤原宮跡発掘調査部史料調査室に配置換	西川 雄大
飛鳥藤原宮跡発掘調査部研究補佐員に採用	福山比呂美
飛鳥資料館主任研究官に配置換	長尾 充
理成文化財センター教務室長に昇任	山崎 哲朗
埋蔵文化財センター教務室教務係長に転任	中久保隆雄
埋蔵文化財センター研究指導部考古工学研究室長に配置換	賀 淳一郎
埋蔵文化財センター研究指導部保有工学研究室長に昇任	内田 昭人
京都大学医学部附属病院管理課課長補佐に転出	福井 昭秀
国立民族学博物館管理部会計課秘書係主任に転出	林 秀之
文化庁文化財保護部記念物調査官に転出	白井 黽
山梨県立大学教務部人学生主幹に転出	井口 正美
京都大学医学部附属病院医事課専門職員に転出	宅間 敏雄
文化庁文化財保護部記念物調査官に転出	加藤 光彦
● 2000年6月15日	山下 登
庶務部会計課長に昇任	小山 浩幸
滋賀医科大学総務部会計課長に転出	江川あらた
● 2000年7月1日	
飛鳥資料館学芸室事務補佐員に採用	
● 2000年8月31日	
辞 職	大山 翠
● 2000年9月1日	
庶務部会計課事務補佐員に採用	向井 愛
● 2000年10月1日	
庶務部会計課建築係長に配置換	今西 康益
● 2000年11月1日	
九州大学総合研究博物館教授に転出	岩永 省三
● 2000年12月31日	
退 職	松本 誠
● 2001年1月1日	
平城宮跡発掘調査部考古第三調査室に採用	渡辺 丈彦
平城宮跡発掘調査部史料調査室に採用	市 大樹
● 2001年1月22日	
飛鳥藤原宮跡発掘調査部技能補佐員に採用	山田 昇司
● 2001年3月1日	
奈良先端科学技術大学院大学研究協力部学術情報課に転出	伊藤 智彦
● 2001年3月31日	
辞 職	浅川 滉男
退 職	乾 春雄

職員一覧

(独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所)

奈良文化財研究所長

町田 章

管理部長

中川良和

文化遺産研究部長

黒崎 直

平城宮跡発掘調査部長

金子裕之

飛鳥藤原宮跡発掘調査部長

田辺征夫

飛鳥資料館長(事務取扱)

町田 章

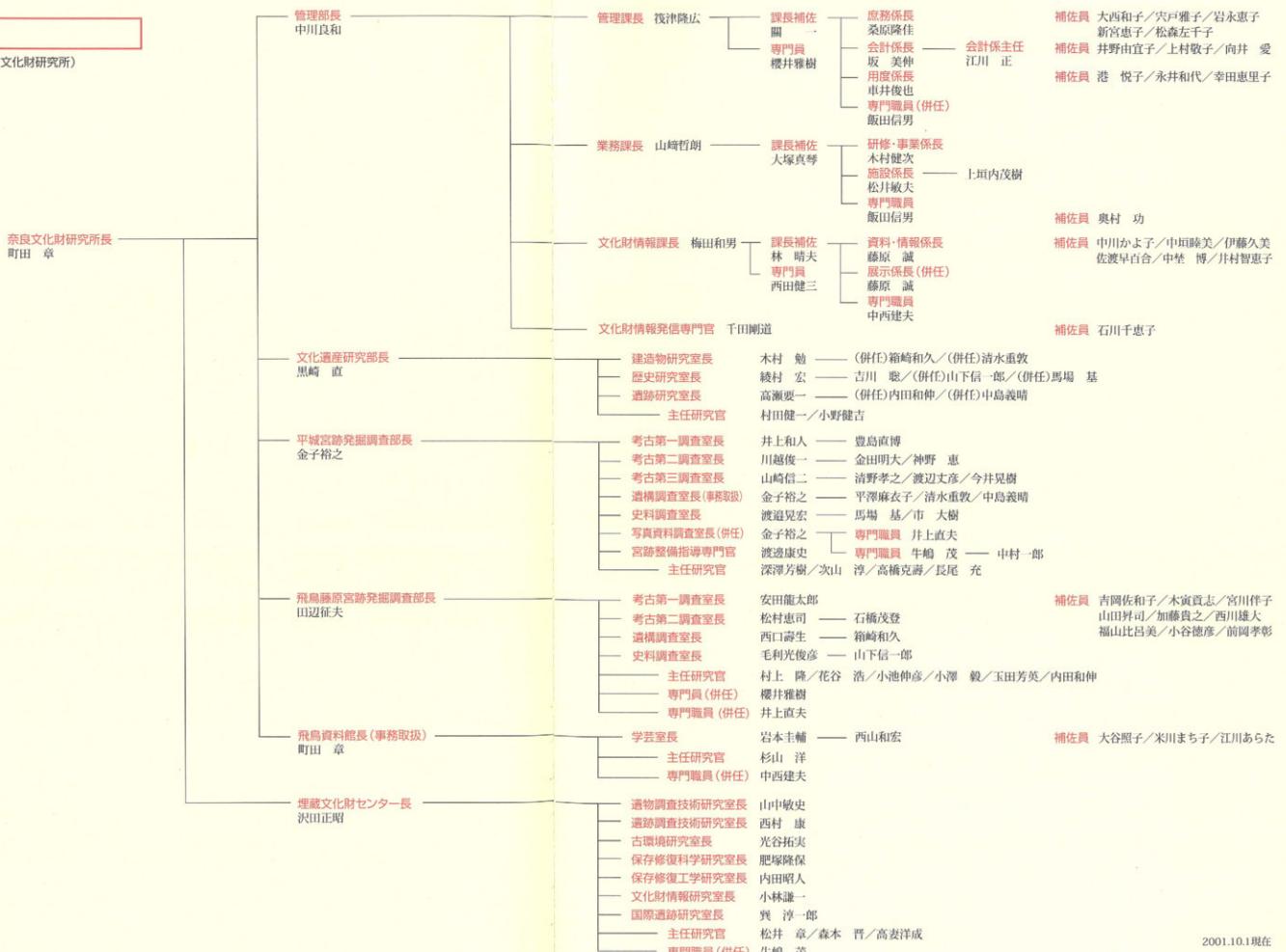
埋蔵文化財センター長

沢田正昭



職員一覧

(独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所)



従来、3分冊構成で刊行していた『奈良国立文化財研究所年報』の第1分冊の後半部分「事業概要報告」を、2001年度は『奈良文化財研究所概要』の分冊、2002年度以降は『奈良文化財研究所概要』に合冊して刊行することになりました。(第2・第3分冊および第1分冊から事業概要報告を除いた前半部分に相当する内容は、2001年度から『奈良文化財研究所紀要』として刊行しています。)



表紙：東院庭園隅楼・鳳凰

平城宮東南隅には庭園がある。8世紀後半、ここは楊梅宮とよばれる宮殿であり、宮殿の屋根には壇礎(緑釉)瓦を葺いたという。庭園の名は楊梅宮南池。園池には中島があり、虹の橋、宮殿、曲水満などがあった。これらは中国の古伝説にみる蓬萊山、方丈山、瀛洲の神仙世界を象ったものであり、樓閣は仙人が好んだ建物である。隅楼の柱が八角であることや、平面形がL字形となるなど全体構造が特殊であることとも関わるであろう。ここは3月3日の曲水の宴など、年中行事の場所であった。

金色の鳳凰は皇后の象徴であり、内裏で見つかった鳳凰文鬼瓦を参考に復元した。

独立行政法人 文化財研究所
奈良文化財研究所概要2001[分冊]

発行日：2002年10月17日

編集発行：独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町2丁目9-1 TEL0742-30-6733(管理課)
デザイン・印刷：株式会社 トータル・メディア開発研究所

